

A 語句の意味と読み

- (1) きぼう／陰曆十六日。／「望」＝満月の十五日。それを「既に」過ぎた日、の意
- (2) いちい／一本の葦（あし）。ここは葦の葉のような小さな舟のたとえ。／果てしない水面と、舟の小ささの対比
- (3) どうしょう／縦に吹く笛。尺八に似た楽器。／この笛の音の悲しさが、後半の問答を呼び起こす
- (4) 夫を亡くした女性。未亡人。／いちばん悲しい立場の人を出して、音の悲しさを強めている
- (5) ふゆう／かげろう。命がごく短い虫。／★「命の短さ」のたとえとして問われる
- (6) ほんのわずかな時間。ここでは人の一生の短さをいう。／すぐあとの「無窮（＝永遠）」と対になる語
- (7) いくら取っても使っても、尽きることのない蓄え。／直前の「取れども禁ずる無く、用いれども竭さず」がその中身

B 句法

- (8) 比況（の助動詞）。「～のようだ」の意。白文では「如」の字にあたる。／この文章は「如＝ごとし」がくり返し出てくるのが特徴
- (9) 対句。白文は「如怨如慕、如泣如訴」で、「如怨如慕」と「如泣如訴」の二句が対になっている。／④で答えた比況「ごとし」を四つ並べて、悲しさを畳みかけている
- (10) 使役（「～しむ」＝「～させる」）。／白文は「舞幽壑之潜蛟、泣孤舟之嫠婦」。動詞を「舞はしむ」「泣かしむ」と使役に読む
- (11) 白文は「此非曹孟徳之詩乎」。「非～乎（哉）」の形で、「～ではないか」と念をおして問いかける言い方。／相手に確

かめさせる形。「～ではない」と打ち消して終わるのではない

- (12) 反語。「今どこにいるのか、いや、どこにもいない」。／★「安くにか～や」。ただの疑問と取ると意味が反対になる
- (13) 再読文字。「いまだ～ず」と、一字を二度読む。／「未」「将」「当」などの仲間

C 主語・指す内容

- (14) 月。／（月が）空をゆっくりと行き来する、の意。※現代語訳の「ゆっくりと動いていく」でも可。／直前の「月東山の上に出で」を受けている
- (15) 客の言葉。／本文後半は、客が英雄の無常と自分たちのはかなさを嘆き、それに蘇子が「水と月」を挙げて答えるという問答の形になっているから。／「蘇子曰はく」と切り替わる手前までが客の言葉
- (16) 曹操（曹孟徳）。三国時代の魏の武将で、「孟徳」は字（あざな）。／直前の「一世の雄」が誰かを見る
- (17) 「江上の清風」と「山間の明月」。／すぐ前の一文に、二つ並べて挙げられている

D 口語訳

- (18) 羽が生えて仙人となり、天に昇っていくかのようだ。／「ごとし」＝「～のようだ」を必ず訳に出す
- (19) （その笛の音は）深い谷底にひそむ蛟（みずち）を舞い立たせ、ひとり舟にいる未亡人を泣かせる。／「～させる」と使役に訳するのが採点の要
- (20) 自分の一生がほんのわずかであることを悲しみ、長江が永遠に尽きないことをうらやむ。／「須臾（短い）」と「無窮（永遠）」が対になっている
- (21) 万物も自分も、みな尽きることがないのだ。／「物」＝この世のすべてのもの、「我」＝自分

E 内容・記述

(22) 恨み慕い泣き訴えるような、もの悲しく哀切な音色。(二十四字) / 四つとも「悲しみ」の方向でそろえてある

(23) 「蜉蝣」は命の短さ、「一粟」は広大な天地の中でのちっぽけさのたとえ。客は自分たちを、短くちっぽけな存在にすぎないと言っている。 / 時間の短さ(蜉蝣)と、空間の小ささ(一粟)の二方向

(24) 「其の变ぜざる者よりして之を觀れば」＝変化しないという面から見たとき。水は流れ去っても川そのものはなくなり、月は満ち欠けしても増えも減りもしないように、変わらない面から見れば万物も自分も尽きることはない、と説いている。 / ★「变ずる者よりして」と「变ぜざる者よりして」の対比が答えの骨

(25) 変わらない面から見れば万物も自分も尽きない。尽きない清風と明月を客と共に楽しめばよいという達観。(四十八字) / 「変と不變」の理と、自然の恵みの二段構えで答えている

F 文学史

(26) 蘇軾(そしよく)。号は東坡(とうば)で「蘇東坡」とも呼ばれる。北宋の文人(一〇三六～一一〇一年)。 / 詩・文・書・画のすべてにすぐれた大才

(27) 対句や押韻を用いて、風物や心情を美しくうたい上げる韻文。宋代には散文に近い自由な形(文賦)へと変わり、この作品はその代表とされる。 / 同じ年の冬に書かれた『後赤壁賦』と二編で伝わる

(28) 筆禍事件(烏台詩案)で罪に問われ、黄州(こうしゅう)へ左遷されていたとき(元豊五年・一〇八二年)の作。舞台の赤壁は黄州郊外の赤鼻磯(せきびき)で、三国時代の「赤壁の戦い」の古戦場とは別の場所とされる。同じ名にちなんで、英雄の興亡を重ね合わせている。 / 苦しい境遇の中で、自然に心の安らぎを見いだした作品

【現代語訳(全文)】

壬戌の年(元豊五年・一〇八二年)の秋、陰曆七月十六日、私(蘇子)は客とともに舟を浮かべ、赤壁のほとりで遊んだ。涼しい風がゆっくりと吹いてきて、水面に波は立たない。(中略)しばらくすると、月が東の山の上に出て、斗宿と牛宿の間をゆっくりと動いていく。白いもやが川面いっぱい横たわり、水の輝きが天と一つに接している。一枚の葦の葉のような小舟が行くにつれて、果てなく広がる水面を進んでいく。心は広々として、まるで大空に乗って風を操り、どこで止まるのかも分からないかのようで、ふわふわと俗世を忘れて独り立ち、羽が生えて仙人となって天に昇っていくかのようだ。(中略)

客の中に洞簫(縦笛)を吹く者がいて、歌に合わせて吹いた。その音は「おおお」と低くうめくようで、恨むよう、慕うよう、泣くよう、訴えるようである。あとに残る響きは細く長く尾を引き、糸のように途切れない。その音は、深い谷底にひそむ蛟(みずち)を舞い立たせ、ひとり舟にいる未亡人を泣かせる(ほど悲しい)。(中略)

(客が言うには、)「月は明るく星はまばらで、かささぎが南へ飛んでいく」——これは曹操の詩ではないか。西の方に夏口を望み、東の方に武昌を望むと、山と川とが入り組み、木々が黒々と青々と茂っている。ここは曹操が周瑜(周郎)に苦しめられた場所ではないか。(中略)(曹操は)もともと一時代の英雄であった。それなのに、今はいったいどこにいるのか(いや、どこにもいない)。まして私とあなたは(中略)この天地にかけろうのようなはかない身を寄せ、大海に浮かぶ一粒の粟のようにちっぽけな存在なのだ。自分の一生がほんのわずかであることを悲しみ、長江が永遠に尽きないことをうらやむ。

蘇子が言うには、「あなたもあの水と月とをご存じだろう。流れ去るものはこの川の水のようであるが、それでいて(水そのものは)いまだかつてなくなっているわけではない。満ち欠けするものはあの月のようであるが、それでいて結局は減ったり増えたりしてはいない。そもそも、変化するという面から見れば、天地でさえ一瞬もそのままではいられない。変化しないという面から見れば、万物も自分も、みな尽きることがないのだ。それなのに、いったい何をうらやむことがあろうか(いや、うらやむ必要はない)。(中略)

ただ、この川の上を吹く清らかな風と、山あいには照る明月だけは、耳がそれを聞けば音となり、目がそれに出れば景色となる。いくら取っても禁じられることがなく、いくら使っても尽きることがない。これこそ造物主(自然)が与えてくれた無尽蔵の恵みであり、私とあなたとが共に楽しめるものなのだ。」と。